

地域 連携

自分らしく生き 自殺を防ごう

—浜松市における絆プロジェクトの試み—

聖隷クリストファー大学 社会福祉学部 准教授 大場義貴

我が国は、かつてないスピードで、少子高齢化という大きな社会構造の変化を経験しています。自殺者数は、バブル経済崩壊後の平成10年以降連続して3万人を上回り、先進諸国の中では最も自殺者が多く、10万人当たりの自殺者数は24人(自殺率)となっています。これは、米国の約2.1倍、英国の3.7倍となっています(出典:2010年WHOデータ)。

その背景として、不況や非正規雇用、派遣労働の増加、生活の多様化による孤立、うつ病の増加などが指摘されており、国は平成18年の自殺対策基本法、平成19年の自殺総合対策大綱と、相次いで法的な整備を進めています。



浜松市においては、平成20年の自殺者数は137人(自殺率16.9)、平成21年は165人(自殺率20.3)、平成22年度は157人(自殺率19.6)で、自殺率は全国の平均より低いものの、10代、30代の自殺者が多く、それらの年齢層への重点的な対策も待たれます。

【平成23年度の取り組み】

(1) 絆プロジェクトの支援
平成22年度の内容を踏襲しつつ、昨年検討した、連携の仕組みを、パイロットスタディとして実際に運用。精神保健福祉士が、司法書士と連携して相談支援を行った。3月末現在で3名の方に対し、のべ23回の絆プロジェクトの支援を行った。

(2) 講演会・シンポジウム (2月25日)
第一部:基調講演 演題 「心理学的剖検による自殺の実態」 勝又陽太郎氏(国立精神・神経医療研究センター/精神保健研究所自殺予防総合対策センター)、
第二部:プロジェクトの概要説明及びシンポジウム(司法書士、精神保健福祉士、家族会参加者は85名。基調講演では、約95%が、シンポジウムでは100%が、「よかった」または、「ややよかった」に回答していた。また、絆プロジェクトに対しては、約9割が関心を持ったと回答があった。自由記述からも、自殺対策に自分達も協力ができるかという意見が多く見受けられた。

【平成22年度の取り組み】

(1) 自殺対策地域連携の検討会の実施
弁護士・司法書士、医師、精神保健福祉士をメンバーとして、関係者間の顔つなぎ、事例検討、「連携の仕組みづくり」の検討を行う。委員会メンバーは、精神科医、内科医、弁護士、司法書士、精神保健福祉士など13名。

(2) 弁護士・司法書士、精神保健福祉士合同の研修会
事例検討などを通じた連携の仕組みづくり(研修会は2回実施)
① 第一回研修会では、事例検討の方法について、専門職者、行政職員が意見を交わした。この意見交換を元に、第二回目の研修会の準備をした。

② 第二回研修会では、弁護士・司法書士が、事例提供(個人を特定できないように配慮)。事前に精神保健福祉士とプロセスを追いながら、メンタルヘルス上の介入ポイントの可能性や経過を分析した事例を用いて研修会を行った。

当日参加者は、約70名。アンケートの結果は、満足度5満点で全体4.7、司法4.4、精神保健福祉士4.8と高かった。

(3) 先駆的取り組みを行っている地域への視察(兵庫県神戸市、滋賀県野洲市)
① 神戸市では、市長をトップとした横断的な組織。今後、自殺予防情報センターを予定。「生きるためのサポート手帳」を発行。② 兵庫県司法書士会では、精神科医師、臨床心理士、精神保健福祉士、司法書士などによる異業種交流勉強会を3カ月に1回行っている。③ 滋賀県野洲市(人口約5万人)では、市民生活総合相談という形で、消費相談の二環として、相談体制を整えている一方、相談できる力が弱い方への援助として、多重債務者包括的支援プロジェクトを行っている。また、野洲市多重債務生活再建マニュアルを作成している。水道料金や税金が払えないことを発端に、徐々に多重債務になっていくことを防ぐため、市民生活相談室と健康推進課が連携して「健康と生活の総合相談」を実施し、行政が責任を持って取り組み、司法関係者や精神保健福祉士は、後方支援を行っていた。民間の連携は元より、自殺対策における行政内連携の必要性が感じられた。



第一回研修会の様子

まとめ

取り組みを通して、全国に先駆けたユニークな浜松モデルの構築に寄与したものと考えられます。研修会・講演会・シンポジウムの時の満足度は高く、今後継続的に開催していく必要があるでしょう。

強い関わりを大切にしたいと共、全てが私たちの生活の中で起こっていることと受け止め、誰もが「浜松で生活する幸せ」を実感できる地域づくりを目指したいと思います。

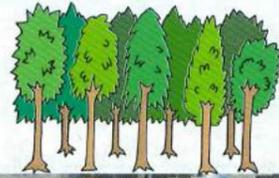
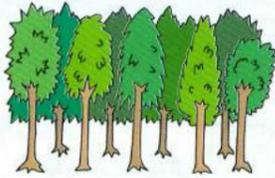


支援

支援活動の中で見えてきたもの

震災直後に岩手県に職員派遣

浜松市社会福祉協議会
地域福祉係 鈴木光昭



浜松市社会福祉協議会（以下、浜松市社協）では、東日本大震災を受け関東ブロック社協の一員として、岩手県宮古市・山田町の社協へ支援のため震災直後から9月まで29人の職員派遣を行い、災害ボランティアセンターの運営や生活支援に関する事業に携わりました。

また、5月から8月まで市民ボランティアを募りボランティアバスを企画し岩手県大船渡市へ延べ165人の方が支援活動を行いました。この活動には大船渡市内の町内会に公民館を活動拠点としてご協力いた

支援活動の中で見えてきたもの一つとして、関係機関・支援者同士の連携が課題にあげられると思います。震災10日後に避難所からヒアリングをしたのですが、様々な機関が同じような調査をしていることを知りました。また、同じ地域に入っている支援者の状況がお互いに見えなかったこともあげられます。正確な多くの情報を把握することが重要となるため、復旧作業・外部からの支援活動を円滑に進めるためには関係機関がどれだけ連携できるかにかかってくると思われ

き、突然来た浜松のボランティアを快く受け入れてくださり、地元の方の暖かさにふれ、大船渡市とのつながりを感じる機会となりました。今回の震災では「津波」が大きくクローズアップされています。沿岸部があり大規模地震が騒がれている東海地方では、他人ごとではないと思います。何を学びとしていくかを、様々な立場の方がしっかりと検証していく必要があると思われ



福島県被災地における子どものこころのケア

浜松医科大学 子どものこころの発達研究センター 特任教授 鈴木勝昭

教育

福島県における震災後の状況は複雑、かつ深刻です。障がい者支援も深刻な問題となつています。その背景には、震災そのものに加え、放射線被曝にまつわる諸問題の存在があることは言うまでもありません。地震と津波が去つても、福島県民は放射線という見えない脅威に晒されるストレス状況下にあるからです。

当然のことながら、このストレスは多くの障がい児者に大きな悪影響を及ぼしています。福祉行政にたずさわる職員の方や学校の先生方はその対応に追われつつも、自らの使命感を奮い立たせ支援にあたっています。震災発生より一年以上ですが、震災発生より一年以上を過ぎ、すでに疲労困憊の状態にあります。

私たち子どものこころの発達研究センターは、福島県教育委員会と連携し震災直後から福島県内の子どもたちのこころのケアに取り組んでいます。初期の調査で明らかになった、①知的・発達障がい当事者が見過ごされて

いる、②自治体機能の低下、③マンパワー、特に専門家の絶対的な不足、という問題をふまえて、人材育成とネットワーク構築を合言葉に、教育・福祉・医療の担当者向け研修会を開催するとともに、小・中・高校で授業形式のメンタルヘルスに関する心理教育を続けてきました。

現在もこの支援は継続中でおそらく数年に及ぶ事業になると私たちは考えています。福島県での教訓を、遠くない将来に巨大地震の発生が危惧される東海地区において生かせるよう、取り組みを続けたいと考えています。



<連絡先>
〒431-3192
静岡県浜松市東区半田山一丁目20-1
浜松医科大学子どものこころの発達研究センター
電話：053-435-2331
メール：k-suzuki@hama-med.ac.jp
鈴木 勝昭

つながり

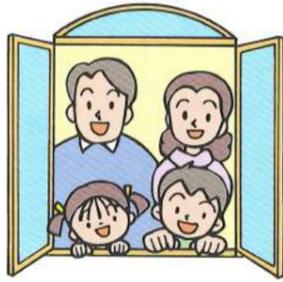
「人と人との 支えあい」

社会福祉法人ひかりの園
相談支援事業所まで

美和 勇一郎

僕は大学を卒業し、福祉の仕事に就き、もうまもなく丸7年が過ぎようとしています。

その中で「この仕事っていいな」と感じるこの1つとして、利用者さん、同僚、関係事業所の方等との支えあいの関係があります。その関係というのはもちろん、家族、地域、友人関係の中などでも成り立っていると思います。ただ仕事においてはこのような関係性が希薄な職種もあるのではないのでしょうか？



私が勤務する浜松協働学舎根洗寮では昨年度から、近隣の事業所を見せていただき、またお話を聞かせていただく、「職員見学研修」を行っていただきます。実施する目的はいろいろあるのですが、その1つとしては、僕のように相談支援業務に従事している者は、日ごろから様々な方と関わらせていただいているのですが、利用者さんの直接支援業務が多く、そのような関わりが限られている職員が、外に目を向け、何かあった時に、

自分自身、日ごろから「らしく浜松」の編集に携わっていらっしゃる方々には大変お世話になっていて、ため、原稿の依頼を受けた時、お断りすることはできませんでした(笑)。

この場をお借りし、日ごろからお世話になっている方々に、お礼、そして「今後ともよろしくお願ひします」と、また「何かお役に立てることがあればいつでも」という思いをお伝えできたらと思います。



Column

～精神科利用当事者の世界観、生きづらさ、思いを「聞いて」「語る」会～
「じゃんだらにい」が、開催されました!

◎平成 24年 6月 16日 (土)
◎なゆた浜北：なゆたホール

「じゃんだらにい」とは精神科利用当事者自らが、病気の体験や病気を抱えながらの生活、人生を中心として、病気の体験での苦しみや苦悩と、そこからの回復についての実体験を語り、精神障がいを持ちながら生きる、生活するということについて考える会です。今回は 3 名の当事者からの発表と、その後グループに分かれて意見交換を行いました。

第 1 部の体験発表ではおよそ 200 名の参加があり、生々しい体験や障がいや病気からの回復、対処法について語ってくれました。第 2 部では発表者がそれぞれの部屋に分かれてグループ意見交換を行いました。

精神科利用当事者、その家族、福祉や医療等の支援者、一般市民など、多くの方々にご参加いただきました。



主催：NPO 法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会
ファイザー株式会社



趣味

市川典男さん

視覚障がい者と一緒に走って。

2007年に東京マラソンが開催されて以降のマラソンのブームが続いています。東京では平日でも夜昼関係なく、皇居外周を走る市民ランナーの多さには驚かされます。お金をかけないで、気軽にできるスポーツ、それがランニングです。

私は市民ランナーとして20年以上走っています。4年前前年ある人から、「視覚障がい者が伴走者を探している」との話がありました。最初は、自分の事で精一杯、もし怪我を負わせたら自分の責任！自分より速く走る人では迷惑になる？など断る理由を見つけて、消極的な気持ちでしたが、後日、練習会に参加したら予想とは反して楽しく走る事ができて、それ以降は伴走が続いています。これまでに浜松ならびに周辺在住の10名の視覚障がい者の方の伴走をしました。それまでは、自分の記録をいかに伸ばすか！維持するか！に焦点がございましたが、現在は視覚障がい者と一緒に走って、苦しみや喜びを分かち合う事を知りました。毎週の定期練習は安全な陸上競技場トラックを使っていますが、週末は公道(歩道)を走ったりします。一人で並んで走るため、歩行者・自転車はもとより、自動車にも迷惑がからぬよう、常に周りの状況を見て、それを説明しなくてはなりません。最初の頃は、段差があります。「5m先から坂になります」とつい言ってしまいましたが、必ず「上り」「下り」を言わないと、つまづく原因になります。今後より多くの視覚障がい者がランニングを楽しめるように微力ながらお手伝いを続けていこうと思っています。

市民向け浜松市版保健福祉新聞「らしく浜松」

広告募集のご案内

①この地域新聞の趣旨、目的

この「地域保健福祉活動の媒体となる市民向け浜松市版保健福祉新聞の研究」は、聖隷クリストファー大学の実施する保健福祉実践開発研究センターによる、地域の保健医療福祉分野に貢献する研究事業として始めました。

障害福祉や精神医療は、近年めまぐるしく状況が変化してきています。これまでは、病院や施設等が中心だった支援から、住み慣れた場所で生活するための支援に重点が置かれるようになってきました。そのためには、障害福祉や精神疾患、精神保健についての正しい知識や、関心の高まり、疾患や障害等の予防、早期支援による二次的障害を予防することが必要です。そのために、地域保健福祉新聞を作成し配布・設置することで、多くの人々に情報を届けたいと思っています。

- ◎研究代表者 大場義典 聖隷クリストファー大学社会福祉学部准教授
- ◎研究分担者 加藤寛盛 NPO 法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会
- ◎研究協力者 中谷高久 浜松市社会福祉協議会 地域支援課
- ◎ 〃 峰野和仁 NPO 法人静岡県作業所連合会・わ 浜松支部
- ◎ 〃 小幡峯司 株式会社メディアス(広告企画会社)
- ◎ 〃 高橋久美子 浜松手をつなぐ育成会
- ◎ 〃 豊田志保 浜松医科大学精神神経科

②タイトルの由来

「らしく」では、その人らしい生き方、無理のない自然体の生き方の実現と、こころ豊かに安心して暮らしていくことができるような社会づくりの実現を目指していきます。

③配布方法

企業、金融機関、教育機関、市の関連機関、その他公的機関、福祉施設などを通じて個人へ配布または郵送。
◎発行部数 20,000部 季刊発行

広告掲載料金

90×240mm	84,000円	(このご案内の枠)
90×118mm	47,250円	(このご案内の1/2)
43×118mm	26,250円	(このご案内の1/4)

(上記は広告掲載費です。広告データ作成の場合は別途。)

● 広告のお問合わせ・お申込みは下記へどうぞ。
電話 053-478-3390 FAX053-478-3391
E-mail: mds@w.email.ne.jp



葉っぱのフレディ

ーいのちの旅ー
翻訳者 みらいななさん

昨年8月、浜松市制100周年自殺対策推進事業で、ミュージカル「葉っぱのフレディーいのちの旅」が上演されました。その原作となった絵本の翻訳者、みらいななさんにお話しを伺うことができました。



インタビュー・構成・編集…加藤寛盛

◎葉っぱのフレディの翻訳のお話が来た経緯は？

これは偶然です。人生でこんな事あるのかって言うくらい、驚いていますね。10何年前は名もない翻訳者でしたのに。当時、出そうと思っていた自然環境の本の出版がダメになってしまつて、さあ困つた、と思つていたので、出版社から先にいただいていたこのフレディが翻訳も終わつてあつたのですぐにでも出版できたのです。それならばフレディを、ということになりました。それがきっかけですね。

◎葉っぱのフレディを翻訳していた間で、大切にしていたことは何でしょうか？

今思えばすーっと訳した。それだけでしたね。中学生だったらわかる様な、とっても優しい英語で。

◎葉っぱのフレディがこま

◎最後にもうひとつ、みらいななさんが、葉っぱのフレディの絵本やミュージカルをこう読んで欲しい、感じて欲しいとありますか？

このフレディのことは、突然爆発したという感じで、ずっと対応に追われてきました。映画になり、教科書に載り、12年前にはミュージカルが始まりました。2001年には松山善三監督から映画に撮りたい、という手紙まで来ました。私は恐れ多くて不安になつて、手紙を置いて本当に逃げましたね。そういうようなことが次々来て、今度は山梨県の全国植樹祭のテーマの本になつたんです。とにかく、そうしたことに対応し続けてこまでもよく生き延びてきました。出版して以来ずっと忙しくて、最近やっとホッとしています。あと驚いたことは、皇后陛下、美智子様から「どうしてこの本を手に入れたのですか？」という質問に「天から降ってきたみたいに、手に入りました」

と答えて、それで許してもらおうと思つていたので「それは、ななさんが求めていたから手に入ったんですよ」っておっしゃつてくださった事ですね。それでその時は本当に胸がいつぱいになっていただけだったのですが、10何年も経つてみるとその時の「こういう本を求めているから」という皇后陛下のお言葉通りだったと思つています。

きました。」っていう一言があるんですね。いろいろな自然災害とか、火山が爆発してくるとか、何かが押し寄せたとしても必ず春が来るっていう約束があるんです。必ずまた春が来ますという事なんです。そういうことも感じてほしいですね。

日本の力、自然の恵みを感じてほしい



絵本翻訳家 みらいななさん

1962年、青山学院大学英文科卒。シャロット・ゾロウ、リン・チェリーらの絵本を翻訳出版、98年レオ・バスカーリアの「葉っぱのフレディーいのちの旅」を翻訳出版し、ベストセラーとなる。91年より山梨県塩山市に在住。現在、山梨英和大学表現文化分野非常勤講師。塩山市立図書館分館・甘草屋敷子ども図書館名誉館長も務める。

編集後記

創刊号の発行から長い間、第2号までの潜伏期があり、周囲から「次の発行はいつ？」というご意見をあちこちで伺ってきました。担当として恥ずかしい限りです。やっと発行までこぎつけることができ、皆さまのお手元に届けることができます。これからはコンスタントな発行を！と意気込む最近です。

”らしく浜松”

季刊紙”らしく浜松”第2号(Vol.2 発行部数20,000部) 2012年7月1日発行

「浜松市版 保健福祉新聞」を、育てていただけませんか。

本紙は、広告掲載企業と聖隷クリストファー大学のご協力によってお届けしています。季刊紙としての活動を継続できますように、多くのご支援を必要としています。賛同会員のみならず、本紙でご紹介させていただく予定です。 ●一般会員:年間会費 1,000円 ●法人会員:年間会費 10,000円 (振込先口座 浜松信用金庫三方原支店2013285 大場義貴)

発行者=浜松市版 保健福祉新聞研究会 事務局=聖隷クリストファー大学(大場研究室)
住所=〒433-8558 浜松市北区三方原町3453
連絡=Tel.053-439-3186 Fax.053-439-1406 E-mail=rashiku@seirei.ac.jp
制作=(株)メディアス 〒430-0907 浜松市中区高林4-6-4

